黒曜石に魅せられて

池谷信之（いけやのぶゆき）(高29)さんを訪ねて

黒曜石を語る時の表情はまるで少年。
一片の土器に導かれ充実の日々を送る。

黒曜石の研究者へのインタヴューである。門外漢は気が重い。沼津市文化財センターへ車を走らせる。駿河湾は秋の午後の光に青くきらめいている。予習不足で授業に臨むあの頃の心境。

―この度は、静岡県文化奨励賞の受賞おめでとうございます。「黒曜石の需給関係と原始社会の構造的変化の研究」で国際的な旧石器時代の見直しに貢献したとして

誰のこと、あっ俺のことかって、そんな感じです。

―尋いている私、意味がよくわかりませんが、いきさつを

子どもの頃から考古学好きでした。韮高への通学路、韮小のむかいが実家です。韮高近くの遺跡に通っては、弥生土器を拾い集めていました。大学で考古学を学び、この文化財センターに職を得ました。

―毎日ここで黒曜石のことを考えているのですか

そんなことはありません。黒曜石に関わることもありますが、ここでは普通の公務員として働いています。年に二冊ほど、「沼津市文化財調査報告書」という専門家向けの資料を編んでいます。その統括責任者、プロデューサーの役割をしています。第二東名建設とかで遺跡が失われていく、かわりに資料を残していく、気をぬくことのできない仕事です。その資料の中から一般読者向けに本が作られます。

―あっ、たとえばこの『黒潮を渡った黒曜石』という本ですね

そうです。わかり易く気軽に読めるようになってます。

―えっ、ちょっとあせりますねェ。黒曜石との出会いは

沼津工専の望月先生とめぐり逢って興味をもちました。黒曜石は狩猟や動物の解体に使う刃物の原料で縄文時代の生活必需品です。弥生時代中頃、鉄の普及で役目を終えます。以降、農耕生活において使われた形跡はありません。黒曜石の面白さは産地が限られるところです。この石はどこで採られたものか、産地を特定できるのです。

―それがこの蛍光X（エックス）なんとか

そうです。望月先生が考え出した蛍光X線分析装置で化学分析をします。ある分子にX線をあてると余計なX線が飛び出してくる。この波長は物質によって特有です。それでこれが鉄だとかアルミだとかがわかる。沼津は黒曜石の研究対象として面白い。長野産、天城産、神津島産と出土する。当時の交易が推測できる。

―はい、それ以上はついていけませんので韮高時代は

高校時代は正直言って良い思い出はありません。部活はテニスです。弱かったですけどね。学業も芳しくなく、特に数学は苦手でした。関根先生に「わかるまで立ってろ」と。まさか高校で立たされるとは。真剣に悩みました。俺はどうやって生きていこう。この成績では通常の進学、就職はないな、ならば後悔のないよう好きな道を進もう。考古学が常に頭の中にあった。明治大学は一年生から考古学が専攻できる。これだ。高二の時です。

三年生になって担任の柴田先生の進路指導、「お前はもっと自分の人生をよく考えろ、好きだからと暮していけたら誰も苦労しないぞ。」と言われて猛反発、クソ、見ておれ、と。おかげで今、好きなことをして暮している。感謝しなくちゃいけませんね。

―先生さすが、プロの技ですね。勉強は苦手とのことですが先ほどからずい分と難しい事を言われますし、本にはもっと難しいことが。

好きな道、必要があればやっていけるものです。自分の興味ある分野をこじ開けて拡げていく、一点突破といえる大学での勉強は自分に向いていた。数学も物理も化学もその為なら頭に入ってくる。もっとも概念さえ解れば面倒な計算はパソコンがやってくれる。

―さきほどの蛍光X線分析装置を自宅に購入されたと

一大決心でした。たいへん高価なものでしたが、これで思う存分黒曜石の産地推定ができる。嬉しさの方が勝りました。研究は平日の帰宅後と土日が勝負です。

―装置が「わが家に舞い降りた」と表現されていました。涙が出ました。お金がかかりましたもんね。

今年から明治大学の黒曜石研究センターの研究員となり、研究者としてお墨付きをもらいました。文科省からの科学研究助成費を申請できるなど研究の幅を拡げられることが嬉しいです。

―これからは

不可能といわれていますが土器の産地を特定できるようにしたい。

―エッ、土器の産地ってわからないのですか

縄文土器は模様や形の研究は進んでいるが、どこの土で作ったのか、をわかるようにしたい。どこから嫁さんが来たかとか人の交流、地域間、部族間の交流の深さ、頻度などがわかるようにしたい。

―また迷宮に入りそうなので話題をかえて、趣味は何ですか

シーカヤックです。近頃は時間がなくてなかなかできませんが。

実は明日から三宅島に行くんです。全くのプライベートですが復興のお手伝いをしたくて火山研究者と一緒に講演をします。少しでも島民のみなさんを勇気づけられたらと。専門をもつ者の使命であり、喜びでもあります。

自信に満ちあふれる池谷さん。私の力量不足、予習不足から核心に迫ることはできず申し訳ありません。是非『黒潮を渡った黒曜石』（新泉社）を一読されたい。伝えたかった事が全て書かれてある。シーカヤックの如く波に乗った、アブラも乗った池谷さんの更なる活躍を祈ります。

文責　原　京（高26）